

◆第7回受賞者から、応募を考えているきみへ一言！◆

<p><大賞> 村本 新氏</p>	<p>「月並みなことしか言えませんが、まずはたくさん本を読むことが大事だと思います。自分の中に貯蓄がなければ書けるものも書けません。私自身も足りないところばかりで大きなことを言えたものではありませんが、とりあえず一冊ずつでもじっくりと読むことをしてみてください。それから、きちんと読み込んでくれる 友人などを見つけて添削してもらえるとより上の段階へ進むことができるかと思います。皆様の作品も楽しみにしています。」</p>
<p><優秀賞> かわひらこ氏</p>	<p>「書きたい人が物語を紡げば良いのです。辛かったら書かなければいいのです。創作とは受動的なものではなく、能動的なものであるべきなのです。」</p>
<p><優秀賞> 伽音氏</p>	<p>「今回の受賞で、まずは一本、形にしてみるということが重要なんだと感じました。そして、それを誰かに読んでもらうことで、自分だけの独りよがりじゃない文章が育っていくのだと思います。荒削りでも認めてもらえる場所なので、ぜひ挑んでほしいです。」</p>
<p><優秀賞> 黒瀬 優真氏</p>	<p>「偉そうに言える立場ではありませんが、日本語には気を付ける事をおすすめします。提出後に幼稚な間違いに気付くと、かなり恥ずかしいです。」</p>

第7回受賞者の作品集はこちらから (PDF : 4.3MB)



新館長から 附属図書館長 山尾 敏孝

今年の4月に附属図書館長になりました。どうぞよろしくお願ひします。

さて、大学では、在学中、学生自らが課題を発見・探究し、自ら学修する能力を身に付けることが求められています。附属図書館（中央館、医学系分館、薬学部分館）では、学生の在学中の勉強を最大限に支援していますので、ぜひご利用ください。また、今年度も本学学生（学部生、大学院生、留学生等）を対象とした「東光原文学賞」を設置し、作品を募集することになりました。本文学賞も今年で8回目ですが、熊大生の言語力向上と創造力豊かな学生の育成、附属図書館の利用者の増加など地域社会における文学・文化活動の一助になることを願っています。熊大生には若さと豊かな才能があります。勉学、アルバイトや部活動等で何かと忙しいでしょうが、夏季休業期を利用しての学び、体験、創作等を是非、具体的な作品に結び付けていただければと思います。熊大生が文学力を大いに発揮されることを期待しています。



熊本大学附属図書館報

東光原 NewsLetter



東光原ニューズレター No.18 (2015.7) 発行：熊本大学附属図書館

小説 募集します

第八回

○平成 27 年 10 月 30 日 17:00 締め切り

○原稿用紙 30 ～ 60 枚相当

○受賞したら・・・

1. あなたの小説が作品集に
2. 図書カード（最高 20 万円分）が貰えます
3. 新聞にも受賞の記事が掲載されます
4. 自慢できます！

○結果発表および表彰式

平成 28 年 1 月 15 日

○審査員教員 3 人の審査によります

詳細は図書館ホームページをご確認ください

東光原文学賞

8th TOKUGEN Literary Award



第3回（平成22年度）
『読書の国のアリス』如月

アリス、というのが私の名前だ。
その西洋風のゴシックじみた響きは、地味な和風の名字にひどく不釣り合いだ。級友からかわれた経験も少なくない。けれど概ね、私はこの名前を気に入っている。響きは悪くないと思うし、人に名前を覚えてもらいやすいから。
幼い頃は、私もウサギ穴に落ちてしまうのかしらとか、鏡の向こうに迷い込んでしまうのかしらとか、いろいろ空想に耽ることも多かった。けれど、結局その空想は空想のままに終わった。ガイド役の白いウサギが私の元を訪ねてくることはなかったし、毛糸玉でじゃれる猫を飼っていたわけでもなかった。私の幼少期は不条理な異世界に縁のないまま終わりを迎え、自己と他者とが複雑に入り組んだ少女時代へと続いていく。



第1回（平成20年度）
『深海魚』島田 ひとみ

あの日はひどい雨だった。風もとても強かった。小さかった僕は吹き飛ばされかけた。大型台風が僕の町を直撃したあの日、八歳だった僕は家を抜け出した。町には人の姿はほとんど見られず、町は凶暴な自然の力に支配されていた。町は僕のものだった。大人用の水色のレインコートを被って、フードの中に少しでも雨が降り込むのを食い止めようと、小さい手は顔の前で十字を切った。しかしそれはまったくの無駄なあがきでしかなかった。



第2回（平成21年度）
『祭囃子』夜行

満月も霞むほどに煌々と輝く、石灯籠が美しかった。
一千年以上の歴史を持つ仁田八幡宮。その年に一度の例大祭とあって、夜明け前にも関わらず境内には大勢の人が集まっている。祭りの当日になっても、やらなければいけない事は山積みらしい。屋台や奉納行列、その他例大祭運営の一切を取り仕切る里久の家族は、それぞれ敷地のどこかに散ってしまっていた。準備に追われる人々の間を里久はちょこまかと飛び回る。



東光原文学賞
第1回～7回の大賞受賞作品
冒頭部分から

QRコードを読み込むと、
各作品集（PDF）の大賞を読むことができます。

第4回（平成23年度）
『秘密都市』伊波 南

秘密都市は存在しない。
したがって、カジゴリは存在しない。私のはもっと存在しない。そのようになっている。
しかし、どうも私もカジゴリも「いる」ようである。あるものを無いと言い続けても、本当に無くなるわけではないのだ。カジゴリはいつもそんな風に言う。そんな簡単なことを理解している人がこの国には驚くほど少ないということも。
秘密都市とはなんであるか。
秘密都市とは正式な名前ではない。秘密都市に住む人や、秘密都市の存在を知る一部の近隣の地域の人たちが、便宜的にこのあたりを指してそう呼んでいるだけである。



第5回（平成24年度）
『かんざくら』猫ノ目 アキラ

「めずらしい。桜が咲く前に、外から人がやってくるなんて」
村長だという彼は、歓迎しているのかいないのか、たいそう判別しにくい顔でそう言った。
自分――夏野武史（なつ の たけし）――は、S県の警察官である。今までは交番勤務だったが、今年からF警察署の生活安全課へ配属され、階級は巡查長に上がった。生活安全課（略して生安）というのは、地域生活を安心して送れるように、犯罪を未然に防止するための活動を行う部署だ。事件の捜査も行うが、パトロールや相談受付といった業務も多い。



第6回（平成25年度）
『四色衣』脇山 怜

私は幼少の頃より、数えるほどしか病院から出たことがなかった。心の臓に抱える欠損。生まれつきの持病が、私の自由を奪う大きな原因であった。
世間の男ならば仕事に励んだり嫁をもらって家庭を作るような年になっても、一向に私の病気を治す技術は世に現れることはなく、その結果、私はぐうたらとした厄介者として家族の生活を圧迫し続けている次第である。



第7回（平成26年度）
『灰塵の記』村元 新

正人は慟哭した。他にできることなどないのだとばかりにただ落涙した。それでも兄の遺したものを濡らしてはならぬと、頭の中のわずかに冷静な部分が叫んでいた。
春と夏の渡しの季節、その気温はやたらと気難しい。いまだに着るよう言われている黒の学生服をだらしく羽織った修治は、気だるげに人ごみをかきわけていた。上からは太陽、周りには人。袖のすり切れた学生服には熱がこもっている。すでに遅刻に入る時間で、居心地がいいとも言えない学校にいる方がいくらかましだろうと思えるくらいにはげんなりとしていた。

